

中学生ボランティア新聞 ふろく 災害ボラ 気持ちが動いたら

先生方へ
やまびこだより
No.155
今号の特集から

*本紙の特集事例をよりくわしく解説！あわせてご活用ください。

ボランティア活動で大切なことは



災害 NGO 結代表
前原土武さん

Q.なぜ災害 NGO 結を始めたのですか？

A.東日本大震災の被災地で、一人のボランティアとして活動

しました。その時、現場でボランティアが活動するためには、事前に色々な準備が必要でした。そして、その準備やボランティアセンターの運営が上手くいくと、一人ひとりの活動が効率良く、沢山の瓦礫が早く片付くと気がつきました。自分一人が99人と一緒に『1』の活動をして100にしかならないけれど、一人が『1.5』の活動ができるような準備をすれば99人でも148.5になるのです。

被災初心者にも上手く運営できるように手助けする人が必要だと考え、活動を始めました。被災地での課題を解決していくには、一人では、一つの団体ではできません。災害ボランティアセンターを運営する社会福祉協議会、行政、NPOなどの連携がとても重要です。それぞれ得意なこと、出来ることが違うので上手く組み合わせ、その隙間を埋めるような動きを心がけています。

災害 NGO 結は、被災地の情報発信、災害ボランティアセンターの立ち上げ運営、防災、復興イベントなどサポート役（一時つなぎ役）としての活動しています。

Q.ボランティアをする上で大切にしてほしいことは？

A.被災地や被災者によって必要な物が何かを、被災者や被災地の立場になって考えることがとても大切です。相手の目線に立って、その気持ちを大切にすることが【寄り添う】ということだと思っています。

Q.子どもたちにメッセージをお願いします。

A.体力や経験がなくても、道に詳しい人が送迎をする、出歩けないけど電話当番をする、お話し上手な人が訪問調査をする、現地にはいないけど募金活動をする…普段は気づかないけど、被災地のために出来ることは沢山あると考えています。

小中学生だからできないことは、きっとそんなに多くありません。いろんな工夫をすれば実現可能になるかもしれません。大人を上手く使うのは、同じ大人よりも子どもたちの方が上手かも。皆さんだからこそ、できることも沢山あるはずですよ。今どんな問題があるのか、ちょっと想像して、感じて、考えて、誰かと協力して行動に移してもらえれば嬉しいです。

被災地で出会ったエピソード

被災した地域の人たちの思い

上田市 独居のおばあさん

発災から4日が経ち、地元大学生が社会福祉協議会と連携を取りながら、各被災地区の自治会長を訪問し、気になるお宅をお伺いする中で、ご高齢で独居の生活を送られている女性の話が出ました。

お話をするとすぐに「お宅に何うと、「今頃やってきたのか!」と憤りをあらわにしていました。声を震わせながら吐き出した言葉を一つ一つ大学生が受け止めていく中で「こんな目に合うなら、死んでしまえばよかったんじゃないか」とお気持ちを吐露されました。

そこで大学生が「つらかったですよね。苦しいですよ」とお声がけをしていると、次第に女性は涙を流しながら「それでもあなたたちが来てくれて本当に良かった…」と話してくれました。

大学生も「どうか生きてほしいです」とお伝えすると、女性も黙って頷きました。大学生が「また来ますね!」という、女性は最初とは見違えるほど朗らかな表情で、見えなくなるまで手を振っていました。

長野市穂保 住民の女性

初めてお会いした時に、「こんな風になってしまった地元を見ているのもつらいし、これから住んでいくのもつらい。だから、家は解体して、別のところに引っ越して住もうと思う」とおっしゃっていました。

しかし、連日たくさんのボランティアが地域で活躍をして、地域が目に見えて綺麗になっていく風景を見ていた女性が、改めてお宅を訪ねたときに「私の大好きな地域が、もう駄目になってしまったと思っていたけれど、たくさんボランティアさんが来てくれたおかげでまた住みたいと思えました。生きるのが辛くて悲しくて仕方なかったけど、今は少し生きてみようと思えました」と、自宅からの風景を見ながら希望を語ってくれました。

地域が目に見えてきれいになっていきうれしいです。



長野市 災害ボランティアの男性

関西からボランティアに参加した男性が、10日前に活動をしていたお宅に再度訪問をすると「あなたたちボランティアさんが来てくれたおかげで、どうしようもなく途方に暮れてしまっていた人生に光が差したわ。本当にありがとう」と住民の方が感謝の言葉を伝えてくれました。「住民さんがありがとうって言ってくれたから明日からも頑張れる気がした!」と気合に火が付いた様子でした。

災害ボラ(災害ボランティア)の活躍

災害ボランティア活動とは？

災害が起きたときに、自発的に行う被災地への支援活動が災害ボランティア活動です。被災した地域や住民が、1日も早く元の生活に戻ることができるようお手伝いします。



避難所での手伝いや炊き出し



家の片づけ・災害ゴミの運び出し



浸水した家や敷地内の泥出し

台風第19号の豪雨災害で、長野県ではのべ70,566人(2019年12月22日時点)の災害ボランティアが活躍し、地域の復旧の支援をしました。

令和元年東日本台風 豪雨災害 長野県で起きたこと

私たちにも できること



長野市穂保地区では千曲川の堤防が決壊し、広い範囲に泥流が流れ込みました。



上田市では上田電鉄別所線の鉄橋が崩落

長野県でも災害ボランティアが大活躍!

2019年10月12日、日本に上陸した台風第19号は日本各地に大きな爪痕を残しました。長野県にも千曲川の堤防決壊や各地での大規模停電など、過去最大級の被害をもたらしました。

北陸新幹線の車両基地の浸水、高速道路などの通行止め、橋の崩壊、電気・ガス・上下水道などが止まり、日常生活に大きな影響を及ぼしました。特産のリンゴやモモをはじめ、農地も甚大な被害を受けました。

東北信地域の千曲川沿いでは、氾濫した川により浸水被害が数多く発生し、川沿いに住む住民の中には「今まで送っていた普段の生活がたった一晩で変わってしまった」と話す人もいます。

長野市の穂保地区で千曲川の堤防が決壊し、長沼・豊野地域が広く浸水。高い

困っている人を助けたい、何とかしなきゃという思いで来ました。

所では2m近く浸水し、自力で家から逃げられず、自衛隊に救出された方も大勢いました。

普段から防災を意識して、備蓄品を整えるなどしている家庭が増えつつある現代ですが、実際に明日住む家がなくなってしまうかもと考えて普段生活を送っているのでしょうか。「まさか」と思っていることが「まさか」起こるのが災害です。

そんな「まさか」で困っている地域で災害ボランティアが活躍しています。

協力：災害NGO結、認定NPO法人ICAN、穂保被災者支援チーム、長野市立東部中学校

令和2年3月発行 発行：社会福祉法人長野県社会福祉協議会 まちづくりボランティアセンター
〒380-0928 長野市若里7-1-7 TEL.026-226-1882 FAX.026-228-0130
E-mail vcenter@nsyakyo.or.jp URL http://www.nsyakyo.or.jp/

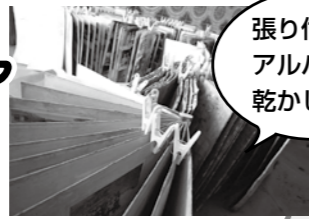


災害ボランティア…思いが集って

令和元年東日本台風 豪雨災害

こんな活動もしました 写真洗浄ボランティア

水害で水や泥につかった写真をきれいに洗って持ち主に届ける活動です。



張り付いたアルバムを乾かします。



認定NPO法人 アイキャンの活動

25年間、世界各地の危機的状況にある子どもたちの保護に取り組んでいます。今回の台風第19号災害で被災した写真を、洗浄して地域住民にお返しし「心の復興」を目指して活動をしています。

認定NPO法人
アイキャン事務局長
井川定一さん

写真が無くなったら

皆さんや皆さんの家族が持っている写真には、何が写っていますか。記憶に限りのある私たちにとって、写真は、過去のある瞬間

を忠実に切り取り、写真に映る時代そのものを思い出させてくれるものです。それらの過去の楽しい「思い出」が詰まった写真が、一瞬ですべて無くなったら、皆さんはどのような気持ちになるのでしょうか。

10月13日の未明、台風第19号が日本各地に甚大な被害をもたらしました。長野県でも多くの方が被災し、現在も住処を追われて親戚の家やアパート等に身を寄せています。災害の現場では、多くの「思い出の品」が見つかります。その中で、最も多いものが写真です。水害によって被災した写真の多くは、バクテリアにより色があせ、その一部が白く消えてしまっています。これを濡れたままにしておくより更に色があせて、写真全体が真っ白になってしまいます。

「長野写真洗浄プロジェクト」の立ち上げ

被災直後より長野市に入り、松代地区や長沼地区において、長野県・市社会福祉協議会と連携して、災害ボランティアのコーディネートを行ってきた私たち認定NPO法人アイキャン(本部:名古屋)は、1月に「長野写真洗浄プロジェクト」を立ち上げました。

このプロジェクトは3つに分かれます。1つ目は、水害によって流され地域に散乱した身元不明の写真を洗浄し、身元を特定、返却する活動です。2つ目は、各家庭にある被災した写真を預かり、洗浄して返却する活動。そして、3つ目は、洗浄方法の研修を各地域で行い、各家庭で軽微な被災写真の洗浄を行えるようにする活動です。

家も壊れ、地域の風景も大きく変わってしまったケースにおいて、過去の写真は、お金で買うことができないとても大切なものです。家や地域の建物の復興だけでなく、「心の復興」が求められているのは、このためです。



あなたにできること

被災した写真は膨大な量になるために、多くのボランティアが必要となり、東北や岡山等の過去の被災地では、すべての写真の洗浄を終えるために1年以上の月日がかかりました。今回の長野での災害においても、多くのボランティアが必要となります。ぜひ、みなさんも「心の復興」に参加してみてください。

(アイキャンフェイスブック: <https://www.facebook.com/ICAN.NGO/>)

現場活動

泥出し・清掃

- 家財の片づけ
- 災害ゴミの運び出し
- 家の中や敷地の清掃

避難所での手伝い

- 炊き出し
- 食事の用意
- 話し相手

被災地の人と交流

物資支援

- 物資の提供
- 物資の整理・配布

後援活動

募金

情報収集・広報

被災地の物を買う

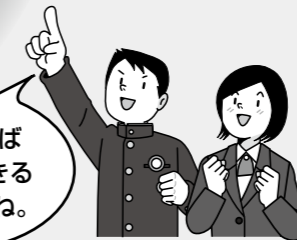
チャリティイベント

それぞれの 思い

思い × できる × やれる

いろいろな形の 災害ボランティア

思いがあれば
たくさんできる
ことがあるね。



できることは必ずあるので
一歩踏み出して気軽に参加を！

北九州市立大学 須磨 航さん

Q.どんな思いで活動しているのですか？

A.写真洗浄の活動は気の遠くなる作業です。私たちの手で救うことのできた写真が住民の

方々に届き、嬉しいことも悲しいことも写真があることで振り返れるのかなと思うと、少しでも早く持ち主の方に戻りたいです。また印刷すればよいという写真もあるかもしれませんが。しかし、その被災した写真が手元に戻り、その写真を伝え続けることで1つの防災活動にもなっていくかもしれません。

Q.なぜ九州から長野へ？

A.なぜかは正直わかりませんが、困っている人を助けたい。それが一番にあると思います。遠くてもできることがあるのであれば、何かしたい！って感じです。

Q.子どもたちにメッセージをお願いします。

A.小学生でも、中学生でも、高校生でも、人見知りでも、力に自信がなくても、必ずできることはあります。少しボランティアに行きにくいなあと思っても、まずはその壁を乗り越えて、何かに参加してみてください。何か見つかるはずですよ！

長野市立 東部中学校の活動

大事な思い出を蘇らせて ～写真洗浄ボランティア～



思い出が詰まった
写真だから
大切に扱おう。

活動に至った経緯

豊野地区在住の本校職員が、農業ボランティアに行き、畑にアルバムが流れ着いていたのを見付けました。畑主の方もアルバムをどうして良いのか分からなかったため、その職員が預かって来ました。その職員は、東日本大震災のボランティアでアルバム洗浄の活動経験があったので、中学生によって洗浄活動できればと思いアルバムを学校に持ってきてくれました。

●大切な写真が泥で汚れていてすごく悲しい気持ちになりました。写真を見て今回の台風がどれだけの被害をもたらしたのかが分かりました。(中1男子)

●泥だらけの写真をきれいにするのは大変だったけど、みんなで洗う人や干す人など分担して協力して泥を落とすことができたのでよかったです。(中1男子)

活動に対して生徒の反応は？

泥で張り付いてしまっているアルバムをジーンと見つめていました。いざ、活動になると、持ち主の方の顔や思い出の場所が残っている写真は限られていたのですが、手で一枚一枚丁寧に洗浄し、洗浄した写真が重ならないように干していました。バクテリアによって異臭もありましたが、根気強く活動し、残った写真から持ち主の方の情報を見つけられました。

●今回の活動をして、少しは人の役に立てたな、私にもできるボランティア活動があったと思いました。活動ができて本当良かったと思いました。(中2女子)



泥を出すだけがボランティアじゃイヤなんだね

みんなが根気強く活動してくれて嬉しいな

私達にもできることあったんだ!

被災地のために頑張ることがあるんだね!

